1925年パリ現代装飾美術・工芸美術国際博覧会の敷地選定に関する考察

A STUDY ON THE SELECTIONS AND THE SETTLEMENT OF THE SITE
FOR THE INTERNATIONAL EXPOSITION OF MODERN DECORATIVE
AND INDUSTRIAL ARTS IN PARIS 1925

三田村 哲哉*, 小林 克弘**

Tetsuya MITAMURA and Katsuhiro KOBAYASHI

Through the consideration of the transition from the selections and the settlement of the site for the International Exposition of Modern Decorative and Industrial Arts in Paris 1925, the followings are made clear:

1) The site settled at the Esplanade des Invalides, Grand Palais, and etc was admired as ideal, through the considerations of the 12 sites nominated by Louis Bonnier.

2) The total site was composed by some parts of the sites which were possessed by some cadres, the committee of the Colonial Exposition in Paris, Ministry of Public Instruction and Beaux-Arts, the municipal authorities of Paris, and etc, because the parts of the site was conceded by them.

keywords: "International Exposition of Modern Decorative and Industrial Arts in Paris, 1925",

Esplanade des Invalides, Grand Palais, Site, Fortifications, Palace of Exposition

1925年パリ現代装飾美術・工芸美術国際博覧会、エスプラナード・デ・ザンヴァリッド、
グラン・パレ、敷地、パリ城壁跡地、博覧会宮

序

1925年に、パリのエスプラナード・デ・ザンヴァリッド及びその
Grand Palais
Exposition Internationale des Arts Décoratifs et Industriels Modernes
対岸のグラン・パレを中心として、現代装飾美術・工芸美術国際博覧
会が開催された。前稿では、その会場の概略に関して、パリで開催さ
れた他の博覧会と比較分析を行い、その特徴を明らかにした¹⁾。これ
に続き、本稿は、本博覧会の敷地選考から決定に至る一連の検討過程
を明らかにするものである。

本博覧会に関する既往研究は、さまざまな視点から行われているが、
大別すると次の3点にまとめることができる。第1点目は、本博覧会で
建設された展示館に関する分析である。第2点目は芸術史の視点から行
われた本博覧会の開催理念に関する考察である。第3点目は、1931年
Exposition coloniale internationale in Paris 1931
パリ国際植民地博覧会の会場及び敷地との関係に関する考察である²⁾。
しかし、本稿で行った敷地選定に関する史的考察は、非常に乏しい。ま
た、本稿は、博覧会計画の企画立案に考察の視点が向けられているとい
う点においても、他と大きく異なるものである。さらに、こうした考察
は、次稿の研究対象である本博覧会の会場計画並びに、各展示館の建築
造形に関する考察に対しても、意味あるものとなろう。そこで、会場計
画や各展示館の建築造形に関する分析のために、本博覧会の敷地が抱え
る条件及び問題点に関する考察も加えて行っている。

また、本博覧会の敷地は、その外形が決定し会場計画の段階に入っ

てからも、それに伴って敷地の部分的な変更が行われている。しか
し、本稿の考察対象は、敷地選考が始まる1911年から、その外形が
決定する1921年までとした。尚、本稿は、本博覧会に関する建築資
料だけではなく、注に示す通り、フランス上院及び下院議会の官報、
パリ市議会の公報、各博覧会の協定書及び、本博覧会に関する報告書
と書状を調査・収集し、それらに基づいて考察を行ったものである。

1. 敷地選考と2つの候補地

本博覧会の計画は、1900年パリ万国博覧会閉会後の装飾芸術家等
の不満の高まりから始まった³⁾。1911年3月に装飾美術に関わる各
団体の代表者が参加して、本博覧会の開催に関する検討委員会が発足
した⁴⁾。本博覧会の敷地に関する検討は、この私的委員会において自
主的に始められた。その結果、前回までの博覧会において継続的に利
用されてきた地域に属するグラン・パレとその周辺地域及び、エスプ
ラナード・デ・ザンヴァリッドは、敷地として利用することが困難で
あると結論づけている⁵⁾。その理由は、その広大な敷地を開催期間で
ある6ヶ月及び、建設と解体に要する期間を含めた長期にわたる敷地
の占有が、不可能と判断したからであった。その一方で、解体計画の
あるパリ城壁跡地が候補地として取り上げられ、特に、マイヨー門か
La Porte Dauphine
La Porte Champerret
らドゥフィヌ門までとマイヨー門からシャンペレー門までが候補地

* 東京都立大学大学院工学研究科建築学専攻
博士課程・修士(工学)

** 東京都立大学大学院工学研究科建築学専攻 教授・工博

Graduate Student, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Graduate School
of Tokyo Metropolitan Univ., M. Eng.

Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Graduate School of Tokyo
Metropolitan Univ., Dr. Eng.

として報告されている⁶⁾ (図-1)。

このような動向を受けて、1912年7月23日に、通商産業省において、博覧会調査委員会が発足し、初めて公的な委員会において博覧会開催に関する検討が本格的に行われるようになった。一方、建築家ルイ・ボニエを中心として12に及ぶ候補地と管理運営に関する調査・検討も同時に行われていた。そして、1913年5月23日にその委員会において、博覧会開催に関する報告書が発表される⁷⁾。

それによると、まずこの委員会の定めた3つの調査・検討項目が、本博覧会の「目的と計画」、「敷地」、「財政」であったことから、敷地の重要性を当初から深く認識していたことがわかる⁸⁾。さらに、この報告書では、12の敷地が取り上げられ、その中から具体的な候補地は、パリ中心部からは西側の郊外に位置するピュトー島とパリ城壁跡地の2地域にまで絞り込まれている (図-1、2)。そして、これらは、取得に関わる実務的な議論は別として、この博覧会調査委員会としての最終的な結論となり、これに基づいて、これら2つの地域は、本博覧会の候補地として確保されることとなる。

また、その他の候補地の多くは、パリ城壁跡地の周辺部、またはさらにパリの郊外に位置した空閑地である (表-1)。ピュトー島とパリ城壁跡地以外の敷地を除外した理由ごとに、大別すると3点に分類できる。第1点目は、敷地6、8、9のように、過去に多くの博覧会が開催されたパリ中心部の敷地には、厳しい制約があり、特に開催期間中の交通問題を理由として除外されている点である (表-1、図-1)。第2点目は、敷地10、11、12のように、パリ郊外に位置する敷地では、パリ中心部との隔たりがあることと、特に交通連絡が不便であることを理由に除外された点である。第3点目は、その他の敷地に、敷地の連続性、経済的問題など、それぞれ個別の除外理由が挙げられている点である⁹⁾。

さらに、候補地に確保されているパリ城壁跡地以外の除外された敷地にも、パリ城壁跡地周辺部に位置するものがある。一方で、パリの城壁跡地開発計画が本格化し、ルイ・ボニエも本博覧会計画と並行して1912年からその開発計画に関わっていた¹⁰⁾。また、ルイ・ボニエが推薦した候補地は、ドゥテュイユ門からドゥフィエヌ門までのブローニュの森に沿ったパリ城壁跡地であり、委員会内においても多くの支持を得ていた (図-2)¹¹⁾。こうした状況からもわかるように、ルイ・ボニエは、パリ中心部においての本博覧会開催を望む一方、それが困難な場合においては、パリ城壁跡地に関連した敷地において開催を試みようとしていた意図が表れている。

また、ルイ・ボニエによる敷地の検討は、主に本博覧会の敷地の選出と、その有効な範囲の面積の計算が主体となっていることがわかる (図-2)。このような敷地検討図は、その当時の土地の用途とその範囲に基づく分類、その中から本博覧会において敷地として利用可能な範囲の割り出しとその面積計算を基に描かれている。また、こうした面積の基準となる最小値は、25から30ヘクタールであると報告されて

おり、この値は、1900年パリ万国博覧会において装飾芸術に分類される展示空間の面積を基準としたものであったことがわかる¹²⁾。

一方、この報告書が定める開催年は、1916年とされていたが、当初の計画から延期を余儀なくされた。そして、1914年の第一次世界大戦勃発によって、本博覧会の計画はさらなる延期を余儀なくされる。

終戦直後の1919年7月2日に、下院議会において本博覧会開催に関する審議が再開された。そこで、3年後の1922年に本博覧会を開

表-1 12の候補地の地域範囲

	候補地
1	L'île de Puteaux et le Champ d'entraînement de Bagatelle ピュトー島とバガテルの運動場
2	Le Bois de Vincennes ヴァンセンヌの森
3	Le Champ de Courses d'Auteuil ドゥテュイユの競馬場
4	Les Terrains des Fortifications et la zone militaire パリ城壁跡地と軍事施設地域
a	de la Porte - Maillot à la Porte - Dauphine マイヨー門からドゥフィエヌ門まで
b	de la Porte - Maillot à la Porte - Champerret マイヨー門からシャンペレー門まで
c	de la Porte - Dauphine à la Porte de Passy et même à la Porte d'Auteuil ドゥフィエヌ門からハッシー門までとドゥフィエヌ門からドゥートゥイユ門まで
d	de la Porte d'Auteuil à la Porte de Saint - Cloud et même jusqu'au bord de la Seine ドゥートゥイユ門からサン・クル門までとドゥートゥイユ門からセヌ河岸まで
5	Le Champ de manœuvres d'Issy - les - Moulineaux イッシー・レ・ムーリネオーの演習場
6	Les Jardins du Trocadéro et du Champ - de - Mars トロカデロとシャン・ドゥ・マルスの公園
7	Les Terrains du quai de Passy augmentés de ceux de l'Usine à gaz ainsi que des terrains des dames de l'Assomption パッシー河岸とダム・デゥ・ラゾンフション
8	Les terrains du Garde-Meuble et du Quai d'Orsay ガルデゥ・ムーブルとオルセー河岸
9	Le Grand - Palais et Le Petit - Palais avec les jardins du Cours - la - Reine et l'Esplanade des Invalides グラン・ハレとフティ・ハレとクー・ラ・レヌヌ庭園とエスプランナード・デ・ザンヴァリッド
10	Les terrains du Rond-Point de la Défense et de Nanterre ラ・デファンスの円形広場とナンテーレ
11	Les terrains du Rond-Point situés à Viroflay ヴィロフレイの円形広場
12	Les terrains du Rond-Point entourant la Pièce d'eau des Suisses à Versailles ヴェルサイユのスイス噴水のある円形広場

図-1 ダイアグラム：パリ城壁跡地を中心とした候補地の位置

図-2 ルイ・ボニエ、パリ城壁跡地とその周辺の博覧会候補地-ドゥテュイユ門からマイヨー門まで、sept-oct. 1919、敷地検討図

催をすることを確認する。さらに、1919年12月から、本博覧会の敷地選考は、新たに発足した博覧会諮問委員会だけではなく、パリ市を中心として審議が展開されるようになる¹³⁾。その中でも、1919年12月15日に、通商産業大臣の要請に対してセーヌ県知事が推薦したピュトー島が最有力候補であることは変わらなかった¹⁴⁾。

ここで、当時の敷地に対する評価を整理すると、その長所は、2点にまとめられる。第1点目は、隣接地であるブローニュの森を博覧会の敷地として拡張利用できるという柔軟性が認められる点である。第2点目は、敷地がブローニュの森に隣接し、豊富な緑地に恵まれている点である。その一方で、この敷地の短所は、この候補地の沿岸には、煙突のある工場が建ち並んでいる点が挙げられている¹⁵⁾。

パリ市議会では、翌年1920年1月に、この敷地の取得に関する審議が採択された。しかし、1920年4月23日の審議において、ピュトー島を本博覧会の敷地に決定することを断念せざるを得なくなる¹⁶⁾。その理由は、地価が第一次世界大戦以前よりも遙かに高騰したこと、さらに、土地の所有者が極めて高額な要求をしたことが挙げられている¹⁷⁾。しかし、こうした状況において、ルイ・ボニエは、ほかに7人の建築家とともに本博覧会の計画に携わるようになる¹⁸⁾。

2. その他の博覧会等の敷地問題

一方、本博覧会の敷地決定の遅れが原因で、開催時期が延期されるにつれて、本博覧会の敷地問題に対して、さらに別の新たな問題が生じた。それは、農業・馬術博覧会宮の建設候補地の問題、1925年開催予定の植民地博覧会の敷地問題、1924年開催のオリンピックの会場問題、パリ・フェアの会場問題が次々と浮上したことである¹⁹⁾。そのため、本博覧会の敷地問題だけをこれらの案件とは個別に取り扱うことが困難となり、パリ城壁跡地を本博覧会の敷地とする案は、本博覧会の議論だけの問題ではなくなった。このような理由とともに、パリ城壁跡地委員会の意見によって、パリ城壁跡地を本博覧会の敷地とする案は廃案に追い込まれる²⁰⁾。

実際には、パリ城壁跡地は非常に細長く、また大きな高低差があり、博覧会会場としての敷地整備は、非常に困難であることも指摘されている²¹⁾ (図-2)。こうした背景には、1919年4月19日のパリ城壁撤去に関する法案によって、パリ城壁跡地に関する議論が高まり、これが単に博覧会の敷地だけの問題ではなくパリ市拡張・再開発という別の議論が生じていたということが挙げられている²²⁾。一方、この5つの案件がどれも広大な敷地を要すること、大規模な建築が伴うことなどの共通した問題点を抱えていた。しかし、これらの案件それぞれが、企画実現に向けて衝突のない調和的解決を望んでいたことと、このような短期間に、国家的な大規模企画が多額の資金を必要とすることから、国をも巻き込んだ議論へと発展する²³⁾。そして、本博覧会の敷地問題は、他の4つの案件とともに議論されるようになる。

そこで、博覧会宮の建設に関する検討が、最初に進められた。そして、この博覧会宮の議論を中心として、他の博覧会等の敷地問題を検討するという方針が進められる²⁴⁾。この博覧会宮は、1889年パリ万国博覧会において建設された機械館が解体され、これに変わる展示館を要求する農業関係者が中心となって提案されたものである²⁵⁾。この建築は、敷地面積が15ヘクタール、建築面積が7ヘクタールという協定に基づいた規模が決められており、まとまった広大な敷地を要することから、1919年のパリ城壁撤去の法案可決が強く後押しした²⁶⁾。

図-3 P.ギデッティ、L.ギデッティ、農業・馬術博覧会宮案、1920年、鳥瞰図

図-4 植民地博覧会、1921年、敷地図

その建設に関する検討は、建築家シャルル・レマルレスキールとヴィクトール・ラルーに委託され、ブローニュ地域についての検討を行っている。一方、パリ市議会では1920年にコンクールを開催した。そこでは、建築家ルイ・イボリト・ボワローが、鉄骨製の大建築を提案している²⁷⁾。さらに、同年に国もコンクールを開催しており、そこでは、建築家ピエール・ギデッティ、ルイ・ギデッティの案が選出されている²⁸⁾ (図-3)。この案も同様に、大空間を確保する鉄とガラスの大展示館であった。こうした博覧会宮建設に関する動向は、政治的な動きとともに、パリ城壁跡地及びその周辺に敷地を誘導した。また、会場を転用するための議論も巻き起こしている。その後、パリ市長の誘致にも後押しされ、1921年12月21日に、博覧会宮の敷地がヴァンセーヌに決定した²⁹⁾ (図-1, 点P)。さらに、この博覧会宮建設の議論は、最終的に植民地博覧会の主会場を1921年7月11日決定の敷地とは異なるヴァンセーヌに誘致する成果も残している (図-4)。

3. 敷地の決定

一方、1920年10月に上院議員フェルナン・ダヴィが、本博覧会の博覧会検討委員会委員長に就任し、本博覧会及び植民地博覧会を中心とした敷地問題の解決に動き出した。このように本博覧会の敷地問題が全く決定しない状況が続く中で、敷地選考に関する議論が、下院議会、パリ市議会、博覧会検討委員会それぞれの立場で行われていたのに対して、この委員長交代以後、その議論の場はフェルナン・ダヴィ、セーヌ県知事、パリ市長及び、植民地博覧会委員長アングルヴァンの4氏による会合に移された³⁰⁾。その結果、先にも述べたように、1921年7月11日に、植民地博覧会の敷地に関する協定が結ばれ、これに

よって植民地博覧会の敷地の外形が決定された³¹⁾ (図-4)。その内容は、植民地博覧会開催のために、パリ市が国に広大な敷地を利用する権利を認めるというものである。その敷地の範囲は、1900年パリ万国博覧会の敷地からトロカデロ宮、グラン・パレ及びプティ・パレを除いた地域とほぼ同じで、過去に開催された博覧会の中でも相当広範囲にわたる敷地が用意されている。また、この博覧会の敷地の中には、博覧会宮建設の議論と関連して、ヴァンセヌも含まれている³²⁾。さらにこの協定が結ばれると同時に、フェルナン・ダヴィが、博覧会宮のような大展示館を提案している。その理由は、植民地博覧会のみならず本博覧会でも利用可能な建築の検討に入ることによって、本博覧会の敷地問題を再び議論の場に登場させるためである。その一方で、フェルナン・ダヴィは、敷地問題解決に主眼を置き、決められた面積の確保と会場の有効利用を優先させた。その結果、博覧会のテーマに関わらず、博覧会宮建設計画の影響を受けて、大展示館による敷地問題の解決が、有効である判断していたと考えられる。

しかし、フェルナン・ダヴィは本博覧会をパリの中心部で開催することを強く望んでいた。そのため、意欲的なフェルナン・ダヴィの敷地問題への取り組みに対して、教育・美術省は、本博覧会の会場としてグラン・パレを利用することに積極的な態度を示した。そこで、教育・美術省は、本博覧会の会期となる1924年5月1日から9月20日までの全面利用を許可する³³⁾。これに対してさらに、フェルナン・ダヴィは、敷地問題解決のために、植民地博覧会委員長アングルヴァンに対して、1921年7月11日に協定によって取得した敷地の一部の利用を要求した。これに対してアングルヴァンは、フェルナン・ダヴィに要求をさまざまな条件付きで認める³⁴⁾。これは、最終的に、1921年11月7日に両博覧会間において協定が正式に結ばれることによって、本博覧会の敷地の外形がほぼ決定することにつながる (図-5、表-2)。

その敷地は、パリの中心部に位置し、グラン・パレ、エスプラナード・デ・ザンヴァリッドが主要な会場となるように計画されている。しかし、こうした敷地の決定は、各部分を管理する省庁等の委譲及び許可などによって成り立っている。ここで記した委譲とは、植民地博覧会が本博覧会に対して、条件付きでその敷地を払い下げたことを示している。具体的には、植民地博覧会から委譲された地域は16ヘクタールあり、クー・ラ・レンヌ、エスプラナード・デ・ザンヴァリッド、アレクサンドル三世橋及び、セヌ川河岸及びその港である³⁵⁾。このセヌ川河岸及びその港は、公共事業省の委譲によって利用可能となった敷地であり、これらはエスプラナード・デ・ザンヴァリッドとグラン・パレが、セヌ川によって敷地が分節されているために、この敷地の連続性を高めることを目的として要求したものである。さらに敷地の連続性を高めるために、パリ市は、クー・ラ・レンヌとグラン・パレの中央車道などの利用を許可したことによって、本博覧会の敷地の外形が決定した。尚、プティ・パレは清掃を予定しているために、会場から場外されている³⁶⁾。

一方、この敷地と1925年に開催された本博覧会の敷地が、異なる点は2点ある。第1点目は、アルペール一世前庭及びその対岸は、1925年の開催時には敷地として利用されたが、1921年の時点では敷地に含まれていない。その理由は、パリ市が1925年7月まで、この敷地の賃貸契約を国立園芸協会と交わしていたからである³⁷⁾。また、クー・ラ・レンヌの路面電車の軌道部分は、1925年開催時には移設されるために、この部分を敷地として利用しているが、1921年の敷地決定時においては、移設計画がなかったため敷地外であった。

図-5 1921年11月7日の協定等によって決定した敷地図

表-2 1921年11月7日の協定等によって決定した敷地の地域範囲

敷地の各範囲	
A	1 Sur la rive droite, la partie du Cours-la-Reine comprise entre l'allée centrale et le parapet de la Seine クー・ラ・レンヌの一部で、中央遊歩道とセヌ川の欄干を含む。 L'esplanade des Invalides, y compris l'avenue du Général-Gallieni
	2 ジェネラル・ガリエニ通りを含むエスプラナード・デ・ザンヴァリッド Les Berges et ponts de la Seine, notamment le pont des Champs-Élysées et le pont des Invalides, depuis leur extrémité en amont du côté du pont de la Concorde jusqu'au pont des Invalides en aval
	3 セヌ川の河岸及び港。シャンゼリゼ港、アンヴァリッド港。上流はコンコルド港の発端から下流はアンヴァリッド港まで。 Le pont Alexandre-III
B	アレクサンドル三世橋 la chaussée centrale du Cours-la-Reine et le Grand-Palais
C	1 クー・ラ・レンヌの中央車道とグラン・パレ l'amorce de l'avenue Alexandre-III, le Petit-Palais et l'avenue Dutuit
	2 アレクサンドル三世通り、プティ・パレ、デュテュイ通りの起工部分

一方、この敷地に対して、一貫して本博覧会の計画に携わってきたルイ・ボニエの見解は、3点にまとめることができる。第1点目は、この敷地がバリ城壁跡地などと比べ、遙かに平坦で広がりがあること、第2点目は、他の有力な候補地に比べ、パリの中心部に近いこと、第3点目は、他の候補地に比べて、この敷地の周囲が、アンヴァリッド、グラン・パレ、プティ・パレなどの壮麗な大建築群、セヌ川及び豊かな緑によって会場の枠組みが完成していることにまとめられる³⁸⁾。また、ルイ・ボニエは、フェルナン・ダヴィの根強い交渉と、パリ市議会の全会一致した賛成意見によってこの敷地が取得できたことを主張しており、最終的には、こうした政治的な動向によって敷地問題が解決したことを意味している。

4. 敷地の条件と問題点

このような過程を経て決定した敷地には、本博覧会開催にあたって多くの条件と問題点を残している。こうした条件及び問題点を大別すると、以下の3点にまとめることができる。第1点目は、この敷地を植民地博覧会より委譲された際に課せられた条件である。第2点目はこの敷地の地理的及び周辺環境に伴う条件である。第3点目は博覧会開催のために敷地を長期間に渡り占有することによって引き起こされる交通問題である。

1) 植民地博覧会より委譲された際に課せられた条件：この条件は2点にまとめられ、それらは、本博覧会と植民地博覧会が同一地域を各博覧会の敷地として利用することによって可能な経費削減を狙ったものである。そのため、本博覧会の開催は、オリンピック開催と同年の1924年に延期され、さらに翌年に植民地博覧会を開催することによってこうした計画が成り立っている。第1点目は、本博覧会の閉会后、利用できるギャラリー及び展示館等は植民地博覧会においても利用するために設けられた条件であり、この敷地の各地域ごとに設けられている。エスプラナード・デ・ザンヴァリッドに建設されるギャラリーは、両博覧会で利用すること、またその間に建設される独立館は、植民地博覧会においても同等の独立館を建設するために、閉会后30日間以内の解体が義務付けられている³⁹⁾。また、クー・ラ・レンヌにおいては、独立館のみ建設が認められるというものである⁴⁰⁾。第2点目は、都市基盤整備に要する負担を両博覧会間で均等に分担しようとするものである。具体的には、本博覧会開催時において、ギャラリー及び展示館まで、水道、ガス、電気、空気、電話等の配管工事を行うというものである⁴¹⁾。植民地博覧会は、シャン・ド・マルスにおいても同じ都市基盤整備を行う必要があったため、大きな負担削減となっている。

2) 敷地の地理的及び周辺環境に伴う条件：これは、敷地の連続性に関する問題である。つまり、それは本博覧会の主要会場であるグラン・パレとエスプラナード・デ・ザンヴァリッドが、セヌ川によって分断されている点である。しかし、敷地内にはセヌ川を渡る橋はアレクサンドル三世橋しかなく、博覧会会場内の交通計画に問題を残している。加えて、その両岸には路面電車の軌道部分があるため、それぞれの両岸の敷地は、さらに細長く分節されていることも大きな問題点であった。そのため、開催期間中、博覧会会場内の交通が、路面電車の軌道部分を通過する交通手段を模索する必要性がまず初めに生じていた。一方、エスプラナード・デ・ザンヴァリッドのセヌ川側に、アンヴァリッド地下鉄駅があることも、敷地の連続性を欠く要素となっている。

3) 開催期間中の一般交通に関する問題：これは、1911年の敷地検討においても指摘されている。開催期間中の一般交通に関する問題である。この問題点は、開催期間中の会場内の交通問題とは異なり、開催に伴って会場周辺の一般交通に生じることが予想される交通問題である⁴²⁾。この問題の中心は、アレクサンドル三世橋であり、その理由は、この橋を博覧会会場内専用とすることによって、一般交通が排除されるからである。パリ市議会では、日常の交通量計算に基づいた報告などととともに、警察を交えた実務的な議論がなされ、大きな問題として最後まで議論が継続された⁴³⁾。

結

このように、現代装飾美術・工芸美術国際博覧会の敷地選考から決定に至る検討過程及び、その敷地の抱える条件及び問題点を明らかに

した。こうした一連の考察によって明らかとなった点を整理すると、以下5点にまとめることができる。

第1点目は、本博覧会の決定した敷地は、さまざまな条件及び問題点を抱えているが、多くの敷地検討に基づいて、最も理想的であるという高い評価が与えられている点である。第2点目は、本博覧会の敷地が、植民地博覧会等からの委譲によって決定しているため、敷地全体は各地域を継ぎ合わせたものとなる点である。そして、この敷地がさまざまな条件を抱えた主要な原因は、こうした敷地決定の過程によって生じたものである。第3点目は、この敷地の決定が、最終段階において、政治的な解決を必要とするが、その決定に至る敷地選考に関する検討過程においては、ルイ・ボニエによる専門的な敷地に関する継続的な考察が、重要な役割を果たしている点である⁴⁴⁾。第4点目は、本博覧会の度重なる延期の主要な原因は、敷地決定の遅れによるものであった点である。この延期に関する一般的な評価は、本博覧会に対して否定的なものが多い⁴⁵⁾。しかし、本博覧会の敷地という点から考察すると、この延期が敷地検討に多くの時間を与え、有効なものであったことが明らかである。第5点目は、本博覧会のみならず、他の博覧会等とともに敷地問題の検討を行ったことによって、パリ城壁跡地及びその周辺地域の再開発に関する検討を促進している点である。

このように本博覧会の敷地は、紆余曲折した過程を経て決定した。こうした敷地に対して描かれた会場計画に関する考察は、稿を改めて述べたい。

註

- 1) 三田村哲哉、小林克弘、中原まり、「パリにおける博覧会の変遷に関する研究—1855-1937年を対象とした配置計画の分析を中心として—」、日本建築学会計画系論文集、519号、1999.5、pp.333-339
- 2) まず吉田綱市氏の先行研究は、本博覧会の展示館に関する考察が主体である。cf.「アール・デコ博とオーギュスト・ペレ」、建築史学、第2号、1984年3月。イヴォンヌ・ブリュナメル氏は、開催後50周年記念の展覧会などとともに、装飾美術史の視点から総合的な考察を行っている。cf.「1925」、Presses de la Connaissance, 1976。また、ナンシー・J. トロイ氏は、芸術史の観点から本博覧会の開催理念等に関する考察を行っている。cf. *Modernism and The Decorative Arts in France – Art Nouveau to Le Corbusier*, Yale University Press, 1991。一方、パトリシア・A. モルトン氏は、1931年に開催されたパリ植民地博覧会との関係から敷地に関して部分的な考察がなされている。cf. *Hybird Modernities – Architecture and Representation at The 1931 Colonial Exposition*, Paris, The MIT Press, 2000。
- 3) 装飾美術に対する不満及び、その普及に関する意見は、本博覧会開催に関する理念、新しい装飾美術の理念及び、過去の博覧会の調査報告など、本博覧会開催に向けた社会的な認知を広げるためのものが多かった。例えば、1906年の下院議員クイバのエコール・デ・ボザールの予算報告において発表された博覧会開催に関する報告、1909年の美術評論家ロジェール・マルクスの論評等が挙げられる。
- 4) 装飾美術に関わる各協会とは以下の団体である。芸術産業助成協会 (Société d'Encouragement à l'Art et l'Industrie)、装飾芸術家協会 (Société des Artistes Décorateurs)、装飾芸術地方連合協会 (Société de l'Union Provinciale des Arts Décoratifs)、フランス芸術家協会 (Société des Artistes français)、ボザール国立協会 (Société Nationale des Beaux-Arts)、サロン・ドートンヌ協会 (Société du Salon d'Automne)、装飾芸術中央連合協会 (Société de l'Union Centrale des Arts Décoratifs) 以上7団体である。cf.「L'Exposition de 1922, Chronique-Notes et informations」, *Art et Décoration revue mensuelle d'art moderne*, Librairie centrale des Beaux-arts, Paris, sept.-oct. 1919, p.17
- 5) *Rapport sur une Exposition Internationale des Arts Décoratifs Modernes Paris 1915*, Imprimerie paturel, 1er juin 1911, pp.14-15。これは、報告書には記述がないが、発表年月日及び内容から、下院議員で装飾芸術中央連合協会会長のフランソワ・カルノーの報告書である

- と判断できる。重要な点は、フランソワ・カルノーが、1912年2月6日に、この報告書に基づいて、1915年に本博覧会を開催するための初めての法案を提出している点である。cf. *Documents parlementaires-Chambre*, ANNEXE No.1641, Imprimerie du Journal officiel, Paris, 6 février 1912, pp.80-81
- 6) その他の候補地は以下の通りである。バガテルの運動場 (Le Champ d'entraînement de Bagatelle), デイシー・レ・ムーリネオーの演習場 (Le Champ d'Issy-les-Moulineaux), ミュエットからボワン・デュ・ジュール門までのバリ城壁跡地 (l'Espace des Fortifications entre la Muette et la Porte du Point du Jour), サン・クル公園 (Le Parc de Saint-Cloud), ロンシャン競馬場 (Les Vaste Hippodromes à longchamp), オウトウイユ (Auteil), ヴァンセンヌ (Vincennes), サン・クル (Saint-Cloud), シャンピニユ (Champigny), メゾン・ラフィツテ (Maisons-Laffitte), オンニン (Enghien), サン・オウエン (Saint-Ouen)。また、報告書、候補地となる地域の数え方などによって、候補地の数え方が異なっている。
- 7) フェルナン・シャプサルは、上院議員で芸術産業助成協会の会長にあった。重要な点はこの報告書は、博覧会開催に関する実質的な調査・検討をまとめたもので、こうした報告書の最終段階に位置するものに達していると評価されている点である。cf. Fernand Chapsal, "Rapport à M. Le Ministre de Commerce, de L'industrie, des Postes et des Télégraphes", Ministère du Commerce de L'industrie, des Postes et des Télégraphes, 23 mai 1913
- 8) Fernand Chapsal, op.cit., 7), p.2
- 9) Fernand Chapsal, op.cit., 7), pp.6-8
- 10) ルイ・ボニエは、パリ市の建築・公園・庭園部長 (Directeur des Services d'Architecture et des Parcs et Jardins) や建築・バリ美化・拡張部主任検査官 (Inspecteur Général des Services d'Architecture et d'Esthétique et de l'Extension de Paris) 等の立場にありながら、パリ市の行政側からバリ城壁跡地の開発計画を行っていた。
- 11) "35-Résolution relative à l'aquisition de l'île de Puteaux et à l'organisation de l'Exposition internationale des Arts décoratifs modernes", *Bulletin municipal officiel de la ville de Paris*, Imprimerie municipale, Paris, dimanche 25 avril 1920, p.2062, 2064.
- 12) Fernand Chapsal, op.cit., 7), p.6
- 13) 博覧会諮問委員会は、1919年10月29日の政令によって発足し、70名を超える委員が選出された。その中に建築家は、ルイ・ボニエ、コルドニエール、トニー・ガルニエ、ヴィクトール・ラルー、シャルル・レマールスクイール、シャルル・ブリュメ、エマニュエル・ボントレモリの以上7名が選ばれていた。cf. "Journal Officiel de la République Française", 29 oct. 1919, pp.12076-12077
- 14) *Documents parlementaires-Chambre des deputes*, ANNEXE No.5825, Imprimerie du Journal officiel, Paris, 19 mars 1923, pp.611-612
- 15) Op.cit., 11), "34-Résolution relative à l'aquisition de l'île de Puteaux et à l'organisation de l'Exposition internationale des Arts décoratifs modernes", samedi 24 avril 1920, p.2043
- 16) Op.cit., 11), p.2059-2060
- 17) ビュトー島の所有者は、オーストリアのロスチャイルド家末裔の共同所有であった。これに加えて、この土地の価格は、第一次世界大戦以前は500万フランであったのに対して、この土地の本格的な検討がなされるようになった1920年には1800万-2000万フランに価格が急騰した。Op.cit., 11), p.2063
- 18) 7人の建築家は、シャルル・ブリュメ、マルセル・マヌ、ロジェ・ブヴァール、シャルル・レトロスヌ、アドルフ・デルヴォー、エルネス・エルシェール、ジャック・ボニエで、モンペンシエール通りに建築部の事務所を構え、自主的に設計活動を開始した。cf. Bernard Marrey, Louis Bonnier 1856-1946, Institut français d'architecture, Pierre Mardaga éditeur, 1988, pp.99-100
- 19) Préfecture du Département de la Seine, Mémoire de M. Le Préfet de la Seine au Conseil Municipal, Imprimerie municipale, Paris, 12 décembre 1921, pp.1-2
- 20) Préfecture du Département de la Seine, op.cit., 19), p.12
- 21) Op.cit., 4), "L'Exposition Internationale des Arts Décoratifs Modernes.", nov.1919, p.1
- 22) Jean-Louis Cohen, Andre Lortie, *Des Fortifs au Perif: Paris, les seuils de la ville*, Éditions du Pavillon de l'Arsenal, Picard Éditions, Paris, 1991, pp.117-125
- 23) Préfecture du Département de la Seine, op.cit., 19), p.3

- 24) 本来は、農業・馬術博覧会館として計画が進められていたが、その建設意図の変化などから、博覧会館と記していることもある。同一の計画を示しまたは、省略した記述であると考えられる。Préfecture du Département de la Seine, Op.cit., 19), p.4
- 25) Préfecture du Département de la Seine, Op.cit., 19), p.3
- 26) Préfecture du Département de la Seine, Op.cit., 19), p.4
- 27) Jean-Louis Cohen, Andre Lortie, Op.cit., 22) p.132
- 28) "Palais des Exposition agricoles", *La Construction Moderne*, Paris, no.40, 1er juillet 1923, p.470
- 29) Préfecture du Département de la Seine, Op.cit., 19), p.10
- 30) Op.cit. 14), p.612
- 31) Signé: A. Autrand, A. Sarraut, "Convention relative à l'organisation de l'Exposition coloniale.", Paris, le 26 juillet 1921, (Délibération du Conseil Municipal du 11 juillet 1921)
- 32) 植民地博覧会もパリ市との協議を重ね、1921年に最初にパリ市と合意した計画は、シャン・ド・マルスが、再開発の負担が大きすぎるため、ブローニュの森のバガテル運動場とバスシー門からマイヨー門までの城壁跡地、またはヴァンセヌの森を敷地として提案していた。しかし、バガテルを公園化することへの不満から前述の敷地に決定したという経緯がある。
- 33) Lucien Dior, "Lettre de M. le Ministre du Commerce et de l'Industrie à M. le Préfet de la Seine.", Paris, le 10 novembre 1921
- 34) Signé: Fernand David, Angoulvant, "Convention relative aux emplacements à concéder éventuellement par l'Exposition coloniale à l'Exposition des arts décoratifs modernes.", Paris, le 7 novembre 1921
- 35) Lucien Dior, Op.cit., 33)
- 36) Lucien Dior, Op.cit., 33)
- 37) Op.cit., 11), "17-Modification des emplacements de l'Exposition internationale des arts décoratifs et industriels modernes.", mardi 10 juillet 1923, p.3009
- 38) Louis Bonnier, "L'Exposition des Arts Décoratifs et Industriels Modernes", *Les Travaux Publics*, Paris, No.832, avril 1926, p.54
- 39) Signé: Fernand David, Angoulvant, "Convention relative aux emplacements à concéder éventuellement par l'Exposition coloniale à l'Exposition des arts décoratifs modernes.-Convention additionnelle no.1", Paris, le 7 novembre 1921, Article Premier
- 40) Op.cit., 39), Article.2
- 41) Op.cit., 39), Article.3
- 42) Op.cit., 11), "17-Modification des emplacements de l'Exposition internationale des Arts décoratifs et Industriels modernes", mardi 10 juillet 1923, pp.3009-3010
- 43) Op.cit., 11), "188-Question de M. Emile Massard à M. le Préfet de Police sur les difficultés de la circulation pendant l'Exposition des arts décoratifs.", mardi 17 juillet 1923, pp.3170-3171
- 44) ルイ・ボニエは、本博覧会以外の他の博覧会計画にも数多く参加しており、例えば、1900年パリ万国博覧会の会場計画に関するコンクールで入賞するなどの実績も持つ。cf. Institut Français d'Architecture-Centre d'archives d'architecture du XXe siècle, Fonds Louis Bonnier, "Exposition Universelle de Paris 1900, 1894, d'Implantation", 35/32
- 45) 吉田綱市, Op.cit., 2)

図版出典

図-1 筆者作成

図-2 Institut Français d'Architecture-Centre d'archives d'architecture du XXe siècle, Fonds Louis Bonnier, "Exposition des Art Décoratifs de Paris 1925 Dossier de Préparation et Suivi", 35/70, (筆者加筆)

図-3 Op.cit., 28), pl.157

図-4 Archive de Paris, VR/255, (筆者加筆)

図-5 Cf. 図-2, (筆者加筆)

表-1 筆者作成

表-2 筆者作成

(2002年7月10日原稿受理, 2002年10月30日採用決定)